

化学物質から天然物質への転換：

—スキンケアにおける新たな時代の幕開け—

化学物質と天然物質についての取り扱いに関する考え方は、スキンケア業界においても大きな課題です：

●化学物質とPL法、天然物質と修治

PL法（製造物責任法）によると、化学物質には未知の有害性があるため、取り扱い注意のラベルが必ず貼られます。天然物質には未知の有効性があるということで、PL法のようなものではありませんが、天然物質だからといって必ずしも全てが安全とは限りません。用量や用法を間違えれば、害になることもあります。

天然物質には、PL法の代わりに「修治」という考え方があり、これは天然物質の毒性を軽減する方法です。天然物質の場合、往々にして微量（ppbレベル）の方が効力を発揮することが多いです。自然とはそういうものです。しかし、化学物質の世界ではそのような微量の概念は一般的ではなく、多ければ多いほど効力を発揮するという考え方が主流です。適切な用量と用法を守ることで、有害性よりも利便性を得るという考え方が一般的です。

●問題点と今後の向き合い方

- **現状：**我々は化学物質使用の「対処療法」的スキンケアの利便性を享受する一方で、環境ホルモン物質（エンドクリン：主に肌の保湿と保護を目的としたスキンケア製品）に対しては、利便性第一の考え方が破綻している部分もあります。pptレベルという想像を絶するような低微量でも人間や動物に障害（皮膚バリア破壊によるアレルギー反応、乾燥、敏感、皮膚の老化）をもたらすからです。それにもかかわらず、化学物質はスキンケア業界でも現在も主役の座を占めています。
- **考え方の転換：**化学物質（対処療法のスキンケアツールとして）と天然物質（根本療法のお手入れツールとして）の両方の特性とリスクを理解し、適切に向き合うことが重要です。
- **天然物質の利用の『お手入れ』推進：**化学物質には未知の有害性があるため、皮膚への影響を第一に考え、化学物質使用のスキンケアから、天然物質使用の『お手入れ』へ転換すること。ただし、天然物質には未知の有効性がありますが、天然物質の毒性を軽減するための「修治」などの考え方を取り入れ、微量ppbレベルでの利用を推進すること。

未来に向けて、化学物質（対処療法のスキンケアツールとして）と天然物質（根本療法のお手入れツールとして）の両方の『使い勝手：Use Ware』の利点を最大限に活かしつつ、肌の健康と安全性への配慮を重視した『お手入れ』アプローチへの転換が求められます。